



7月・企業での実習 ①

刈谷市のツルタ製作所では、安城特別支援学校（安城市）の生徒の企業実習に若手社員を「ブラザー」として付け、指導する。そこには「社員を丁寧に育成することが社の発展に欠かせない」との思いがある。

ものづくりの盛んな三河地方には大手企業が多い。「働く側が就職先に困らないほど企業が数多くあるため、中小企業が人材を獲得するには非常に苦労が多い地域だ」と鶴田昌宏会長が明かす。社が置かれたこの状況が、独自の社員教育システムづくりへとつながった。

二十年前ほど前は中途採用者がほとんど。従業員の高齢化が課題の一つだった。いくら自動化を進めても「全てをロボット任せにす

るというわけにはいかない。人があってこそものづくり」。しかし工業系の学生は大手企業への就職を希望する。それなら「文系の学生や機械が苦手な人でもやりがいを持って仕事と向き合ってもらい、製品の高い品質を維持したい。そのため「活躍できる人材を育てる仕組みを自社で持つことが必要だ」。

新入社員研修に五カ月間を当て、現場実習とともに座学を充実させている。テキストは絵や工場内の写真、漫画風の解説なども加えたオリジナル。鉄と鋼の違いといった素材に関する説明や、機械工学など工

業系大学で学ぶ内容のほか、自社の加工技術、仕事の手順など働く上で必要な知識を幅広く網羅し、みっちり学ぶ。



①新入社員用に用いるオリジナルテキストの一部 ②実習受け入れに向けて打ち合わせる鶴田会長ら（いずれも刈谷市のツルタ製作所で

とってやりがいがある一方、重圧も大きい。「講義が成功すれば自信になる。先生役の若手社員を指導する上司も必死です」と酒井さおり総務部長。「入社してから早い段階で人に教えることに慣れる。だから特別支援学校の生徒たちが来ても気負いなく、指導ができるのだと思う」と鶴田さんはとらえる。

ブラザーは企業実習中、生徒たちが楽しく働けるように心を配り、良さや適性を見抜こうと向き合う。自分たちが、先輩社員からそうしてもらったように。ツルタ製作所には今春、安城特別支援学校から二人が入社した。今年も七月と九月に一人ずつ二週間、男子生徒が実習を予定する。「皆、楽しみに待っていますよ」と鶴田さんがほほ笑んだ。

（四方さつき）

安城特別支援学校高等部で、企業への就職を目指す生徒たちの一年を密着取材しています。次回は企業で行われる現場実習の様子をお伝えします。

若手が先生 互いに学ぶ